

『傍目で異常に恋してる』（ストックホルム症候群ガン決まり版）

鷹司秀の家が爆発した。

彼に恨みを持つ男が、車ごと家に突っ込んできて、それが炎上したのだ。
鷹司秀の動かしたプロジェクトで倒産した会社の、元社長による復讐だった。

玄関に思い切り突っ込んだ車は、その場で爆発炎上。
帰宅直後であった鷹司秀は、手足の複雑骨折に火傷の上、意識不明の重体となった。

その機に乗じて、逃げた女がいる。

鷹司秀が一方的に一目惚れし、長期にわたり監禁していた女性だ。

彼女は何が起こったかはわからないまま、とにかくその衝撃で崩れた壁から逃げた。

下着同然の服しか着ておらず、足元は裸足だった。

郊外の小規模な森の中の細い夜道を彼女は必死で走ったが、その逃亡劇はあつという間に終わった。

鷹司秀によって監禁されていた“愛妻”を、鷹司グループが見逃すはずはなかったのだ。

森を抜け出す前に、黒い服の男たちに彼女はあっさりと捕まってしまった。

鷹司グループの跡取りが執着する女だとは理解されていても、その扱いは鷹司秀に比べれば乱暴なものだ。

ここに至って、おそらくは一生、自分は鷹司秀の用意した檻から抜け出せないのだと女は理解した。

鷹司グループの跡取り― 鷹司秀のスペアとして育てられたという次男が、

彼女にそう説明したから。

偽の死体まで用意して社会的に殺した女を、表の社会に戻すわけにはいかにない。

死んだはずの彼女が世間に戻って今までのことを訴えれば、さすがの鷹司家でもまずいことになる。

「僕としては、兄さんがもし死んじゃったらそのまま一緒に同じ墓に入ってもらっても構わないんだけどね。その方がリスクだって少ないし、兄さんもきっと嬉しいだろうし。でも遺言状にさ、もし自分に何かあったら君のことは不自由なく養うようにって書いてあったんだ。だから安心して、兄さんの側で可愛くしてなよ」

仕立てのいいスーツを着た青年は、そう言い放ったあと女を鷹司秀の病室へと放り込んだ。

病室はやけに広く、当たり前のように女が暮らせる分のベッドや服などが用意されていた。

「出入口にはすぐ入ってこれるよう警備員がいるし、風呂とトイレ以外には監視カメラがついてるよ。ほら、そこと、ここ」

指をさして示された場所には、死角ができないように配置されたカメラが天井から下がっていた。

女が何かおかしなことをすれば、即座に警備員が乗り込んでいて制圧をするためだ。

「欲しいものがあつたら、壁の電話で秘書に連絡してくればいい。それじゃあね、義姉さん」

鷹司弟は、言うべきことを全て言うと言ったと早々に立ち去っていった。

グループの跡取りが意識不明の重体になったせいで、スぺアだった彼はにわかに忙しくなったのだ。

女と鷹司秀しかいない部屋で、医療機器の電子音だけが響く。

容態は安定したが、いまだ油断はできない。そういう状況であると聞かされた。

包帯だらけの男の顔を、じっと見た。

この男がこうして無防備に寝る姿を、初めて目にしたかもしれない。

女が見る鷹司秀は常に活力が漲っていたし、基本的に彼が入眠する頃には女の方は気絶同然に意識を失っていた。

整っているな、と今更ながらに思う。

奇跡的にほとんど怪我のない顔だけを見れば、鷹司秀はただ眠っているだけに見えた。

——もつと普通に出会っていたなら、自分たちはどんな関係になっていただろうか。

自分たちの“馴れ初め”は、嫌というほど聞かされていた。

通勤路を歩く自分を、車に乗った鷹司秀が偶然見つけたのだ。

ほとんど天災のような、理不尽さだ。

それでも、そこで直接声をかけられたなら。

あるいは常識的な範囲でのアプローチをされたなら、この極上の男を最初から拒むことは難しかっただろう。

受け入れてさえ仕舞えば愛情深い男だということは、長い監禁生活でもう理解した。

もしくは、そう思い込むことで、そして思い込んだことを自体を忘れてしまうことで、女は自分の心を守ることに成功していた。

だからこそ、もつとマシな出会いがあれば、と最初から存在しなかった可能性を胸の内ですべてしてしまう。

鷹司秀の、黒いまつ毛に縁取られたまぶたが震える。

息を呑んでそれを見守っていると、朦朧としているらしい鷹司秀が迷いもせず女の方に視線を向けた。

かすれた、低く甘さを含んだ声が病室に響く。

「……ああ、よかった。無事だったんだね」

満身創痍の男の言葉に、女の涙腺は決壊した。

起き抜けに“愛妻”が号泣し始めたのを見て、鷹司秀が慌てる。

「ど、どうしたの。やっぱりどこか、怪我をしたのかい？ 大丈夫、うちの医者腕がいいから、すぐに治るよ。……ナースコールはどこだ？ ……つ、いたた……なんだこれ、身体中痛むな。ああ、大丈夫、心配ない。僕は平気だから、まず医者……まいったな、これじゃあ涙も拭けないじゃないか」

頬を伝う涙が何に由来しているのか、女自身にすらよくわからなかった。

騒ぎを察して黒服たちが部屋の中を覗き込むまで、女はずっと泣き続けた。



鷹司秀の生命力は凄まじかった。

一時は命すら危ぶまれていたというのに、治療を受けた結果見る見る間に回復していった。

服の下には火傷跡が残るものの、折れていた骨は順当にくつついたのだ。

その回復力には、医師も目を丸くしていた。

鷹司秀曰く、愛妻に心配をかけるわけにはいかないかららしいが、そう呼ばれた女の方は首を振って否定していた。

心配などしていないと何度主張しても、鷹司秀は彼女の言葉を笑顔でいなした。

女の号泣は、鷹司秀の中で自分への愛故だと理解されてしまったのだ。

「あとはいりハビリだけだつて。今度はどこに家を建てようか……父さんがうるさいから実家に戻ってもいいけど、やっぱり二人きりの方がいいよね。しばらくは家事もできないから、お手伝いさん呼ぶことになるけど……」

知らない人が来るのは嫌だ。

鷹司秀以外の人間は、自分のことを彼の付属品だと思っている。

惨めな境遇を思い出させられるくらいなら、二人きりで暮らす方がまだマシだ。

鷹司秀は、少なくともそういう種類の惨めさを自分に寄越すことはないのだから。

「そんなに早く家に帰りたい？ ……ふふ、いいよ。君がそういうなら、さつさと帰っちゃおう。僕もいい加減、他の奴らが君をじろじろ見るの、頭に來てんだ。じゃあ、ごめんね……しばらくは家事とかで迷惑かけちゃうと思うけど、できるだけ早く治しちゃうからよろしくね」

鷹司秀の言葉通り、彼と愛妻は医師の許可が出るや否や、早々に新居を建てるまでの仮家へと消えていった。

リハビリ生活中に色々あつて、最終的に受けと攻めが逆転するとはこの時誰も想像だにしていなかったが、それはまた別の話。